

最も遠い銀河 129億1900万光年

すばる望遠鏡、観測記録更新

これまでで最も遠方にある銀河を、国立天文台や総合研究大学院大学のチームがすばる望遠鏡(米ハワイ州)で観測した。地球からの距離は約129億1900万光年。地球に届く光は、約137億年前のビッグバンで宇宙が誕生した7・5億年後の様子を伝えていることになる。

総研大の渋谷隆俊さんは、かみのけ座とくじら座の周辺にある約6万個もの天体を観測。遠くの銀河特有の光を出していた天体を選び出し、光の波長などを分析して、地球からの距離をはじき出した。すばるが持つ「最も遠い銀河」の記録を約100万光年上回った。

今回の観測は、一度に多くの天体をとらえるすばるの視野の広さを生かした。

今後の改良で、視野はさらに広がる。渋谷さんは「多くの遠方銀河を見つけ、初期の宇宙の姿を明らかにしていきたい」と話す。

成果は米天文誌「アストロフィジカル・ジャーナル」に掲載される。(田中誠士)

◆最も遠い銀河発見

どこまで遠くの銀河を観測できるかに挑んでいる総合研究大学院大と国立天文台の研究チームは4日、すばる望遠鏡(米ハワイ島)を使い、これまで最も遠かった129億1000万光年(1光年は約9兆4600億キロ)先よりも約40万光年先の銀河を発見、撮影に成功したと発表した。研究成果は10日付の米天文誌「アストロフィジカル・ジャーナル」に掲載される。